



TITLE:

花山だより(九月)

AUTHOR(S):

月斗

CITATION:

月斗. 花山だより(九月). 天界 1935, 16(175): 34-34

ISSUE DATE:

1935-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167122>

RIGHT:

花 山 だ よ り (九月)

近頃、全く無軌道振りの天候には閉口だ。何時になつたら軌道に歸るか？
又しても雨だ、風だ！本月初頭、教室の好々爺、通稱“又さん”の死が報ぜられた。一同啞然として、ありし日の氏の溫容に一時は我と我が耳を疑ふばかり。“又さん”は天文臺の豐田氏の尊父で古くから天文教室に務められ、其の溫顔、舉止一同の愛惜に耐へないものがある。天文臺に運ばれた氏の遺愛の葵花を見るにつけても、人の世の無常に新たなる哀惜を捧げる次第である。

從來天文臺では格別の規則と云つた様なものを定めずによつて來たが、近來臺員の増加に伴ひ、器械や宿舍の事等も複雑になつたので、今度宿舍規定觀測規定が定まり、追つて服務規定も發表される筈である。參觀に就ては本部庶部課宛申込む様通知しても、一向其の手續き無しに來る人が多く、當方としても一般の便利は計り度いが、今後は斷然御斷りする方針する心算である。參觀される方に就ては一般に男子が婦人よりも眞面目で、特に中學生が眞面目な態度で見學されるのは注目す可き事である。12日は明月で山本先生も花山で月見されたが、此の日わざわざ市内からも數人の風流の士が見えて構内を散策してゐた。14日は來年の日食對策委員會を榮友會館で開催、會する者25名、中々の盛會であつた。引續いて花山で稻葉先生、柴田先生の日食の話があり、山本臺長の北海道日食觀測計畫の御話があつた。圖書室にあふれる程の盛會で、終つて一同月と土星を觀望して十時頃散會した。稻葉先生は明年度の日蝕用のシデロスタツトの修理に忙殺され、柴田先生も独自の考案の下に試作をして居られる。其他の諸先生も蝕自の研究、觀測に餘念無く精心せられてゐるのを見て、大いに意を強ふする次第である。今度故中村先生の舍弟中村覺氏が來られて、花山で亡兄の遺業を整理される傍ら、將來天文研究に、協會の事業に大いに敏腕を振はれる様になつた。月斗生